

## 年賀状から思う

友人が「70歳になったら年賀状は止めにした」と言っていた。

ああ、なるほど、そういう考え方もあるのだ。所謂「義理年賀状」なのか。

現役時代に出して、いつの間にか「来るから出す」「出すから来る」という、循環に陥っているかもしれない。

「年に一度くらい出せばいいではないの。私は父親の関係の分までいまだ出している」という方も現れた。

私も、長い職域の中で、「この方にはお世話になった」という場合は出して、相手も返事をくれるから、「年賀状交際」が続いている。



しかし、70歳を機に「義理年賀状」は止めることにした。

またこの年齢になると、残念なことに「鬼籍」に入られた方も何人か出てきた。

(それも年賀状のやりとりでわかるのだ)

そうでなくとも、老化現象が始まるのもこの年代が一般的で、体力的にも、そして精神的にも「無気力」になってくるようだ。

もう、いつ「お迎え」が来てもいいように、準備をしておかなくては、と思うようになってきた。

現代では、いつどんな形(交通事故、殺人、突然死等)で「あの世」へ行くかは分からない。

その直前に「走馬燈」のように、やり残したことが頭をめぐっては「悔い」が残って、あの世で安心していただけないと思う。

友人から借りた文庫本「ガンになって考えたこと」(竹中文良、元日赤病院外科部長)のエピローグがなかなか印象的だったので、ワープロ打ちして保存した。(3ページ)

いまから、26年も前に書かれたものだが、その内容は現代の状況とさほど変わらない。

当時(今でもそうなのか)、「ガン」はかくも恐ろしく、その告知は「死刑宣告」を受けたように、タブー視されていた時代。

その彼は、「死ぬときは、ガンで死ぬのが一番理想的だ」と言う。「ガンは神が人類に与えた最後の恵み」

「死期がおおよそ分かるので、それまでに色々準備ができる」というのが、理由のようだが、確かにそうだ。

その場合も、「手術」など受けなくて、自然体(痛み等はモルヒネで緩和)で行くのも正解かもしれない。

そういえば、10年ほど前でしたか、医学界を震撼させた「近藤 誠」医師の「ガンは放置が良い」(治るガンと、そうで無いもの)に通じるところあると思う。

「年賀状」は、そういった意味でも、「元気に生きている証」なのかもしれない。